

【令和6年度 中学部の実践】

1 中学部の仮説

中学部では、子ども自身が学びのつながりや蓄積、成長を実感できない要因として、子どもの学習の「ゴール」が明確でなく、教師側の「期待する姿」と子ども自身の「あこがれの姿(思いや願い)」にギャップがあるからではないかと考えた。

そこで、学部研究の方向性としては、

- ①子ども自身が描く『あこがれの姿(思いや願い)』に迫ること
- ②教師が子どもの内面に寄り添い、日々の授業における子どもの学び(その子自身が意味を見出していること)をつなぎ、学びのまとまりを見える化することで、『少しづつ良くなっている自分』への気付きを促すこと

上記の2点を重点として、授業づくりを行うこととした。

2 中学部の取組

(1)事例生徒Aについての子ども理解（認知特性とそれを踏まえた支援と配慮）

①興味・関心・意欲

【得意】

- ・「今、ここ」に注目する
- ・繰り返しの体験の中で知識として定着する
- ・具体物や自分の目や耳で確認できる反応を捉える(聴覚優位)
- ・後先考えず、「今、ここ」でやりたいことがやりたい

【不得意】

- ・ゴールを見通して行動する
- ・目的から逆算して今すべきことを考える
- ・見たこと聞いたことからイメージしたり、連想したりする
- ・そこにはないものに思いをはせたり、先を推測したりする
- ・パターンを読んだり、欠けている情報を推理したりする

②人間関係・コミュニケーション

【得意】

- ・表情や声など、目で見て耳で聴いて分かる反応を捉える
- ・相手の大きな反応を引き出そうとする
- ・自分の興味・関心に従って関わる

【不得意】

- ・相手の気持ちや置かれている状況を理解する
- ・そのときの状況や相手の反応の意味を後から振り返る
- ・自分に関わってくれる人の意図を理解する

③本人の得意や強みを生かした支援と苦手や弱さを補う配慮事項

【日常生活場面】

ア 支援

- ・分かりやすい表情とリアクションで関わり手の気持ちを具体的に伝える。(「〇〇してくれるとうれしいな。助かるな。」と具体的に関わり手の気持ちも添えて伝える。)
- ・本人の話を丁寧に聞き、本人が関心をもっているものや見ているもの、話すこと(ノート、カタツムリと青虫、魚図鑑、マリオカートなど)に関わり手も関心をもち、共有する。

イ 配慮

- ・本人の言動を評価する際は、『本人の言動が周りの人にどのような影響を与えたのか(周りの人がどのような気持ちになったのか)』という観点で関わり手が意味付け・価値付けをして、「正解か不正解」ではなく「本人や周りの人にとってどのような意味があるか」で評価する。
- ・他の授業や生活場面で良かった様子を他の授業でも話題にする。(「〇〇してくれて助かっ

た」、「こんなふうに頑張っていてうれしい。」を本人だけではなく、周囲の教師や友達とも共有する。)

・いたずらに対しては、冷静に対処する。(大きなアクションをとらない)

・遠いゴール(教師側の期待する姿)に対する目標ではなく、今取り組んでいることに対する自分のあこがれの姿(思いや願い)を教師とともに考えるようにする。

【作業学習】

ア 支援

・繰り返しの作業(少しの失敗をしてもすぐに修正できる工程と内容)を設定し、スマルステップで積み重ねるようにする。

・作業を始めたら、手を止めずに一つのことをやり遂げるようにする。近くにいる教師が見ていて気付いた問題や課題解決のポイントとなることは、一つやり遂げて、次の作業を始める前に「〇〇をするともっと良くなるよ。」と伝える。(作業を始めたら途中で手を止めないようにする。)

・数に着目した目標設定を行う。

・振り返りでは、『できたこと(本人の言動)が周りの人にどのような影響を与えたのか』という観点で即時評価して日誌に残す。(「すきまがなく編めてるから、〇〇先生が喜ぶね。」など写真(動画)や具体物と言葉をセットにして伝える。)

・実際にに行く、自分の目で見る、店員さんと話す(インタビューする)、製品を渡すなどの体験を取り入れる。

イ 配慮

・遠いゴール(教師側の期待する姿)よりも、『今日、何をどのくらいやるのか』を提示する。(教師側の期待する姿に対する目標設定は行わない。期待する姿に無理やりはめ込まない。)

・『本人の頑張り→周りの人に与えた影響(喜んでもらえた様子の写真と気持ちを表す吹き出し)』をセットで提示し、意味付け・価値付けをして本人の意味あるもの(学び)としてまとまりをつくる。

・作業におけるポイントは、作業に取り組む前にあらかじめキーワードで分かりやすく伝えたり、手順表で提示したりする。

(2)授業実践(作業学習)

単元名	地域のお店にプレゼント～店員さんやお客様を笑顔にしよう～
学習集団	中学部クラフト班(1年生3名、2年生3名、3年生3名 計9名)
単元目標	・地域のお店が必要とする製品を製作する活動を通して、自分の役割に最後まで取り組むとともに、仲間と意見を交えたり、協力したりしながらより良い製品を製作することができる。 ・仲間と協力して製品製作を進め、製品を地域のお店へ寄付する活動を通して、「ありがとう」や「助かったよ」などの言葉を掛けもらうことで人や社会の役に立つことができたことを実感したり、この活動を「やってよかった」や「頑張ったかいがあった」などの達成感を感じたりすることができる。
評価規準 ※	・任された自分の役割に最後まで取り組んだり、製品を地域のお店に寄付したりする活動を通して、自分の取組が周りの人や地域の人の役に立つことにつながっていること、社会貢献につながっていることへの理解を深めている。(知識・理解) ・チームで協力しながら製品製作を進める中で、自分と仲間との関係や役割を考えて仲間に言葉を掛けたり、相手の気持ちを考えた行動をしたりしている。 (思考力・判断力・表現力) ・自分の役割を成し遂げたことや製品の寄付を通して地域社会に貢献できることを喜び、「もっとつくりたい」、「より良い製品にしたい」、「他者に喜んでもらいたい」などの気持ちを表現しながら、製品製作に取り組んでいる。(学びに向かう力)

※評価規準:職業・家庭2段階 職業分野 A 職業生活 ア働くことの意義

【単元について】

クラフト班では、1学期の学習の中で、製品（クラフトバンドコースターや小さなかご〔縦8cm×横12cm〕）を製作し、身近な人たちへのプレゼントを行ってきた。プレゼントすることで身近な人たちが笑顔になることを知り、「もっとプレゼントしたい。」「もっと笑顔にしたい。」という気持ちをもつなど、製品を作る喜びを感じられるようになった。一方で、「長く使ってもらうことで相手の役に立つ」という視点に関しての意識は薄く、相手が必要としている製品や長く使える丈夫な製品を作つてプレゼントしたいという意識は低い。そこで、本単元では、製品をプレゼントして終わるのでなく、相手が必要とする製品を作つし、長く使ってもらうことで相手の役に立つことを実感する機会としたい。そして、その結果として相手から感謝されることを通して、「やってよかった。」や「頑張ってよかった。」という達成感を味わうことで、自己効力感や自己肯定感の向上につなげていきたいと考えた。

このねらいを実現するために大岩地区にあるパン屋（以下、A店と表記）を対象に製品（大きなかご〔縦27cm×横36cm〕や布で製作したミニトートバック）を製作・寄付し、使用後の感想を受けることを通して、製品製作の価値の気付きにつなげる本単元を設定した。A店を対象に活動を行うことで、製作した製品を渡す相手が、これまでの身近な人から地域の小売店に変わるだけではなく、商品（食べ物）を入れる道具を作ることになるため、今まで以上に製品の品質（使いやすさや耐久性）に意識を向ける良い機会となり、生徒の課題の解決にもつながると考えた。

【単元における事例生徒Aへの具体的なアプローチ】

自分なりの学び (本人が意味を見い出していること・もの)	<ul style="list-style-type: none"> ・間違えずに、手順を守つて進めたい ・失敗しないようにしたい ・やり直しがないようにしたい
納得感のあること・もの (頑張ってきたこと・自信をもつてできること)	<ul style="list-style-type: none"> ・今までやつていた小さなかごを作りたい ・慣れた仕事をやりたい ・たくさんの仕事を（数を多く）やりたい ・○○先生と一緒にやりたい
本人のあこがれの姿 (本人の思いや願い)	<ul style="list-style-type: none"> ・慣れた仕事を間違えずに○個（周、セット）完成させたい
教師側の期待する姿	<ol style="list-style-type: none"> ① 自分の役割に最後まで取り組む姿 ② 自分の取組が周りの人に良い影響を与えていることを実感する姿
予想される自分なりの思考 (自分の思いや願いを元にしながら、環境からの働き掛けに対してどんなことを思い、何を考えるか)	<ol style="list-style-type: none"> ① 自分の仕事を○個頑張るぞ。 ② 小さなかごをプレゼントしたら○○先生が喜んで笑顔になつたな。前に行つた高齢者施設のおじいちゃんおばあちゃんも笑顔になつたな。喜んでもらえて嬉しいな。
教師側の期待する姿と自分なりの思考とのギャップに対するアプローチ (支援と配慮)	<p>【支援】</p> <ul style="list-style-type: none"> ・実際にパン屋へ行き、店長さんや店員さんとのやりとりを行う。（実際に見る、聞く、話す、渡す） ・毎時間の振り返りでは、『できた/できなかつた』の正解・不正解の評価ではなく、『できたこと（本人の頑張り）が周りの人にどのような影響を与えたのか』という観点で意味付けして日誌に残す。 ・自分の取組（頑張つて大きなかごを製作したこと）とパン屋さんの店長さんや店員さんが笑顔になった（喜んでもられた）ことがつながるように、写真を使った掲示物を提示する。 <p>【配慮】</p> <ul style="list-style-type: none"> ・毎時間の目標は、『今日、何をどのくらいやるのか』を目標とする。 ・『本人の取組（頑張り）→周りの人に与えた影響（喜んでもられた様子の写真と気持ちを表す吹き出し）』をセットで提示し、意味付けをする。この取組を繰り返し、単元の最後に『自分が頑張つたことで、パン屋さんを含むいろいろな人たちが笑顔になつた・喜んでもられた』と意味付けをし、単元を通した本人の意味あるもの（学び）としてまとめる。

【事例生徒 A の内面（思いや物事への向き合い方・捉え方）の変容】

学習の様子	
学習中の変容	<ul style="list-style-type: none"> ・A店に納品するかごの製作に取り組み始めたが、これまで製作してきたかごに比べて大きさが約3倍となり、1段編み込みを終えるのに掛かる時間と編み込みの回数が増加したため、2段編み込みを終えたところで「疲れた。」と発言していた。 ・このような様子を受けて、作業内容と手立ての検討を行った。本人の得意な（好きな）はさみを使った工程を取り入れることとし、「2段編み込み→クラフトバンドの切り出し→2段編み込み…」という流れで、2つの工程を担うこととした。次時からは時間内に目標である6段の編み込みができるようになった。 ・毎回の授業において、目標とする6段の編み込みを達成できたことを教師や仲間に報告し、共有することで、「ありがとう。」や「すごいね。」という言葉を掛けてもらい、自信をもって任せられた作業に取り組むことができた。また、振り返りにおいて、「Aさんが編み込みを頑張って進めているおかげで、Bさんが仕上げの工程に取り組めるから『ありがとう。』って言ってくれたね。」と本人の頑張りが周りに与えている影響について、具体的に伝え付箋に書いて日誌に貼る（見える化する）ことで、自分の作業により意欲的に取り組むことができた。 ・単元の終盤には、切り出したクラフトバンドを使ってかごの土台を製作しているCさんから「切り出しの数が足りないから1本切ってください。」と依頼を受けると、すぐに取り組み、仲間を助ける場面があった。振り返りにおいて、「Aさんがすぐに切り出しの作業をやってくれたおかげで、Cさんが助かったよね。」と仲間の作業を助けてあげられたことを具体的に伝えることで、A本人から「○○したら△△さんが助かるかな？」という発言が増え、『人のためになりたい』、『人を助けたい』という気持ちの高まりを感じた。
学習後の変容	<ul style="list-style-type: none"> ・次の単元「作業販売会に向けて」の目標づくりでは、「どんな姿を目指したいですか。」と聞かれると、価値観リストの中から『人を助ける』という価値観を自分で選び、何度も人を助ける姿を目指したいと発言した。 ・Aと同じ編み込みの工程に取り組んでいる仲間が、途中で編めなくなってしまった様子を見て、続きの編み込みに自ら取り組み、授業内で2つかごを完成させることができた。手伝ってもらった仲間から「ありがとう。」と言葉を掛けられると、自分が仲間を助けられたことを実感する姿が見られた。 ・編み込みの工程に取り組んでいる際に、クラフトバンドがねじれてしまったことに気付くと、その都度教師に報告と相談をすることができるようになり、『より良いものを作りたい』という気持ちが芽生えてきたように感じた。

(3)生活への広がり（有効なアプローチを日常生活につなげ、学びの蓄積を促す）

事例生徒との日常生活における対人的な関わりにおいて、『できた/できなかった』の正解・不正解の評価ではなく、『できたこと（本人の頑張り）や言動が周りの人々にどのような影響を与えたのか』という観点で意味付けするアプローチ（やりとり）を大切にした。

【日常生活場面でのエピソード】

事例生徒は、これまで日常生活において自分の好きな教師に対してだけ自発的に「〇〇先生、おはよう。」と挨拶をすることが多かった。自発的な挨拶がないときは、事例生徒に対してこちらから「Aさん、おはよう。」と挨拶をし、「おはよう。」と返してくれたときに、「Aさんが気持ちのいい挨拶をしてくれて先生は嬉しいな。気持ちのいい挨拶をするとみんな喜んでくれるね。」と『自発的な挨拶をすることで周りの人は心地良い気持ちや嬉しい気持ちになる』と意味付けをするようにした。このやりとりを繰り返すことで、自発的に朝の挨拶ができる場面が増え、日中にすれ違ったときにも「こんにちは。（挨拶をすると）みんな喜んでくれるよね。」と意味付けしたことを教師に伝えるようになった。

【体育場面（長距離走）でのエピソード】

長距離記録会の本番に向けて、城北公園外周6周の自己記録更新を目指して、ペースメーカーの教師と一緒にペースで走る（遅れないように走る）ことを意識して練習に取り組んだ。3周目くらいになって、息が上がり少し遅れそうになったときに、「先生にもっと近づいて。」と言葉を掛けると、「苦しいよ。2周で終わりがいいよ。」と発言した。そのとき、近くを走っていた担任の教師や普段自分から話し掛けることが多い教師から「Aさん、すごいね！頑張ってるね！」や「いいよ、いいよ！その調子で頑張ろう！」などと言葉を掛けられると、やる気が上がりペースメーカーの教師に追いつくことができた。追いついたところで、「Aさんが頑張って走っているとそれを見た〇〇先生や△△先生は嬉しくて笑顔になっていたね。Aさんが頑張って走ると先生たちは喜んでくれるんだね。」と言葉を掛けた。すると、「頑張って走ると〇〇先生と△△先生が喜んでくれるね。」と発言した。その後、時々ペースが遅れることがあったが、その都度追いつく頑張りを見せ、ペースメーカーの教師と一緒にゴールして自己記録を更新することができた。走り終わった後の振り返りでは、「6周頑張って走ると先生たちが喜んでくれるね。」と次時の目標周数を決めることができた。

【エピソードの考察】

上記のようなエピソードに加え、日常生活における全体的な変容として、休んだ仲間の仕事を自ら進んで行ったり、教師から依頼された仕事を快く引き受けたりする姿が見られようになった。

このようなAの変容と本人が得意とする認知的な力を照らし合わせて考えると、『自分の言動後、相手の表情や声など、目で見て耳で聴いて分かる反応を捉え、繰り返しの体験の中で知識として定着させた（〇〇をすると相手が喜ぶということをマッチングさせた）』と捉えることができるだろう。

挨拶のエピソードを取り上げて考えてみると、現状としては、『相手が喜んでくれるから挨拶をする』というよりは、『〇〇先生は挨拶をすると喜んでくれる』ということを理解し、繰り返している段階と思われる。しかし、『自分の言動→周りの人に与える影響』という観点で意味付けするというアプローチを、さまざまな場面の対人的なやりとりにおいてつなげることによって、現在多くの場面で『自分の言動によって周りに良い影響を与えることができた』という体験が蓄積されている。今後、それらの体験を通して、『少しずつ良くなっている自分』を実感するだけでなく、それらの体験から『自分は周りに良い影響を与えることができる存在であること』に気付いたり、『自分の言動後の周りの人たちに与える影響そのものが本人にとって意味あること（学び）』になったりする姿が期待される。

このように、有効なアプローチを日常生活場面につなげ、体験を蓄積することによって、今後A自身の内面において『体験が経験（体験から自分なりに意味付けした学び）へと昇華され、物事への向き合い方や捉え方が変化する』ことが期待できると捉えることができるだろう。

3 まとめと次年度に向けて

今年度の学部研究では、授業内において、教わる側である子ども（学習者）の目線に立ち、子ども自身が描く『あこがれの姿（思いや願い）』に迫ること（教師側の期待する姿に無理やりはめ込まないようにすること）を大切にした。また、子どもと関わる教師は、子どもの内面に寄り添い、他者（仲間や教師）との共感的な関わりと対話（意味付けや価値付け）や、仲間同士の認め合いやアドバイスなどの環境因子の後押しを大切にすることにより、日々の授業における子どもの学び（その子どもが意味を見い出していることや納得感のあるもの）をつなぎ、学びのまとまりを見える化する（掲示物やワークシート、日誌等で子ども自身を見て振り返ったり、確認したりできるようにする）ことで、『少しずつ良くなっている自分』への気付きを促すことを目指してきた。

このような取組に重きを置き、授業づくりや事例生徒へのアプローチを検討し、実践を積み重ねてきた。学部でその取組の意義や意味を共有しながら授業の内容を検討し、活動設定や教材・教具、掲示物の工夫を行ったり、事例生徒への有効なアプローチを日常生活につなげて子どもの変容を共有したりすることにより、学部の教師全員で学部研究の取組の有効性を実感することができたと考える。次年度においても、同じ方向性で授業づくりを行うとともに、子ども一人一人に有効なアプローチを検討し、そのアプローチを日常生活場面につなげていきたい。

子ども一人一人に対する有効なアプローチについては、事例生徒を1名取り上げて検討を行ってきた。授業及び日常生活における子どもとのやりとりにおいて、『子ども理解』から明らかになった子ども自身が今の自分として意味を見い出していることを『自分なりの学び』と捉え、それを生かした対的なやりとりを行ったり、子ども自身が納得感のあること（自分なりに頑張ってきたこと、努力してきたこと、自信をもってできることなど）を生かした活動設定を行ったりしてきた。そのため、事例生徒にとって、今の自分としての自然な文脈の中で、学習を積み重ねることができたと推察される。また、このようなやりとりや活動設定を基盤としながら、教える側である教師が事例生徒に対してこれからの発達として期待する姿を共有し、その姿に迫るためのアプローチを検討してきた。そして、そのアプローチを授業場面のみならず日常生活場面においてつなげることができたため、事例生徒は『少しずつ良くなっている自分』を実感することができたのではないだろうか。この一連の流れとこれから期待される事例生徒の姿をまとめてみると、

- ①子ども自身が描く『あこがれの姿（思いや願い）』を目指して日々の学習に取り組み、子ども自身の『自分なりの学び』や『納得感のあること』を生かしたやりとりや活動設定を基盤とする。（学びの主体である子どもの立場に立った学習環境の設定を行う）
- ②子ども自身のこれまでの発達や今の自分としての『自分なりの学び』を踏まえ、子どものこれからの発達として期待する姿を共有し、その姿に迫る有効なアプローチを検討する。（発達的視点で子どもを捉えた上で教える側の教師の期待する姿を共有し、そのための支援と配慮を検討する）
- ③有効なアプローチを授業場面だけでなく、日常生活にもつなげて実践し、『これからの発達として期待する姿に迫るための学び』=『体験』をつなぎ、蓄積する。
- ④振り返りにおいて、他者（仲間や教師）との共感的な関わりと対話（意味付けや価値付け）や、仲間同士の認め合いやアドバイスなどのやりとりを大切にし、『子ども自身が体験と自分をつなげて考える』ことを促し、『少しずつ良くなっている自分』の実感を目指す。
- ⑤ ③④を繰り返し、子ども自身の内面において、『体験が経験（体験から自分なりに意味付けした学び）へと昇華され、思いや物事への向き合い方や捉え方が変化する（内面が成長する）』ことを期待する。（子ども自身の内面において起こる変化を期待する）

上記の流れで進めてきたと言えるだろう。次年度においてもこの流れを大切にし、子ども一人一人が今の自分として実感している学び（『自分なりの学び』や『納得感のあること』）と教える側の教師がこれから発達として期待する姿に迫るための学び（体験）をつなげ、体験を蓄積し、子ども自身の内面において、体験が経験へと昇華され、思いや物事への向き合い方や捉え方が変化する（内面が成長する）ことを目指していきたい。